

## 体験過程スケールのセラピスト・バージョンに関する一考察

関西大学大学院心理学研究科 中田 行重  
越山 綾・樋口 隆弘  
福塚 夢野・細見 知加・村田 悠香

### 要約

体験過程のセラピストバージョンの評定値を Klein ら (1986) の 2 事例を用いて検討した。また、異なる立場の心理療法であるその 2 事例のアプローチについて検討した。評定の困難さや評定基準の見直しなどの課題が見つかった。特に TR6 と P6 の評定については今後の検討が必要である。また、2 事例については個々の立場特有の言葉かけが見られたが、それが必ずしも体験過程を推進していない部分も見られた。

キーワード： 体験過程スケール セラピスト・バージョン Experiential Therapy

### I. はじめに

Klein ら (1986) によると 1) うまく行った心理療法において時間の経過と共に高まるクライアント (Client、以後 Cl とする) の何らかの質、あるいは行動、または 2) 心理療法の成功例において初回からずっと変わらず続いているもの、として体験過程 (Gendlin, 1964) のある様式が存在する。体験過程スケール (Experiencing Scale、以後 EXP スケールとする) とは体験過程に Cl がどの程度触れ、推進されているかを評定する尺度である。EXP スケールは当初は、Cl (あるいは心理療法の患者) の体験過程を測定するものとして開発され (Klein et al., 1970)、次にセラピスト (Therapist、以後 Th とする) の体験過程も測定する尺度として開発された (Klein et al., 1986)。前者については既にわが国でも細かな評定例を記載してその方法が発表されている (池見ら、1986) が、Th の体験過程も評定する後者については文献の紹介はあっても、実際の評定による相互作用などの重要な研究は、筆者らが知る限り行われてい

ない。Cl の変化をとらえるものとしては前者だけでよいが、Th の体験のあり方が Cl にどのように影響するかという問題や、双方の相互作用などについて調べるためには後者も必要になってくる。実際には、後者の論文には Cl、Th の双方の体験過程の評定方法が記載されている。後者が余り用いられないのはこのスケールの問題なのか、単に研究がなされなかったのか不明であるが、実際に使ってみることで分かっていくことがあるだろう。本稿では、後者、すなわち Th の体験過程の評定尺度を“セラピスト・バージョン (Therapist Version、以後 Th.V.)”と呼ぶこととする。

本稿の目的は Klein ら (1986) に参照し、1) そこに掲げられている 2 つの心理療法の逐語録に付された Th.V. の評定値を検討し、使用方法に関して考察を紹介する。2) また、その 2 つの逐語録は 1 目が Experiential Therapy (現在は本邦でフォーカシング指向心理療法と呼ばれている) で、2 目が Eclectic Dynamic Therapy (折衷的力動心理療法、力動的に焦点付けられた折衷的方法とでも言うべき心理療法)

である。タイプの異なる心理療法を比較して治療者のアプローチを体験過程の視点から考察する。

心理面接の逐語録、掲載されている評定例(pp.61-65)を示し、逐語録の日本語訳および考察に必要と思われる箇所の理由付けを筆者らが行った。評定基準はKleinら(1986)を参照のこと。評定欄の×は評定不能の意味。

## II. 評定例

以下にKleinら(1986)による実際の2つの

### 1. 第1の面接(Experiential Therapyから)

番号	逐語	評定	理由
C1	来る途中、考えてたんだけど…あんまり自分のことをよく思っていないなあって	P2	感情に言及していない
T1	こう思っているのね…なぜそんなに自分に自信がないんだろうって	TR5 TM4	Cの感情や反応が今現在探求されるべき問題としてCの視点から提示されている
C2	えー、うーん	×	
T2	というより、そんなにははっきりと自分に問いかけてるわけではないのかな	TR5 TM4	
C3	私、夢を見たんだけど、私はこの男の子と二人っきりで、あー(沈黙)…そして、夢は実際素敵だった。それは本当に素敵な関係だったの。次の日にそのことを考えたんだけど、なんで現実にはそんなことがないのかなって。彼は本当は私のことをそんなに悪いと思わないだろうと思うし…もうひとつ考えていたのが、私はなぜそんなに長い間学校を休んだのかってことで、もう行けるというところまで来たのに、私は提出物を持ってなくて、学校に行けなくなってしまう。私は変に焦ってびりびりしてしまっていて結局逃げてしまうの	P3	感情に言及して夢を語るため
T3	この2つのことは何か似ていると言っているのね	TR5 TM4	
C4	うん、私自身何やかやと理由をつけては全力を出さないようにしてるの…あー	P3	
T4	あなたは、もう行けるというところまで来るのに、何かが引きとめている、と	TR4 TM4	Cの体験過程に焦点づけている／Cの語る内容を精緻化
C5	うん		
T5	それで、“焦ってびりびり”がそれにぴったりの言葉なのね	TR4 TM4	
C6	うん、うん、えー、自分で自分を引き戻してしまう	P3	
T6	引き戻す、ね	TR4 TM3	Cの今の体験過程を語るように焦点づけている／Cの感情反応への関心
C7	焦ってびりびりっていうのは、引き戻すよりはもっと表面的なもので、その焦ってびりびりが起こるのは、わたしの一部が、えっとほら「今それをしなくちゃだめ」と言うときなの	P4	自分がどんな感じかを伝えようとしている

体験過程スケールのセラピスト・バージョンに関する一考察

番号	逐 語	評定	理 由
T7	そう、何が引き戻しているのかは、わからないけど、焦ってぴりぴりが引き戻すわけではないのね	TR5 TM4	Cの感情に関する仮説が提示されているが、T自身はその仮説を探ろうとしていない
C8	そう、焦ってぴりぴりっていうのは結果なの	P4	
T8	ということは、引き戻すのがどんな感じか、引き戻りたがっているのが何なのかは本当はわからないのね	TR5 TM4	
C9	えっと…えー…私は自分自身のそういうことについて考えたくないの、それで、えっと、何か悪いことがわかってしまいそうで怖い	P5	自分の体験過程について仮説を検討
T9	もし、自分自身が前に進むことを想像したら、引き戻す感じがある？	TR5 TM5	Cに仮説が生じるように、Tは連想をつなごうとし、Cによって語られている以上のことを理解しようとしている
C10	うん、今引き戻す感じがある… その引き戻す感じが、麻薬の中にいる、ちょうどそんな感じ	P4	
T10	麻薬の中にね	TR3 TM2	内面への言及はあるが精緻化していない/Cの開示を続けさせたり明確にしたいという意図で発言
C11	マリファナが引っ込むのに最適な場所なの	P3	特定の状況について言及
T11	そこが引っ込むのに最適な場所なのね	TR3 TM3	内面への言及はあるが精緻化していない/Cの感情反応への関心
C12	うん、でももし、ギリギリ行ける線まで行かないんだったら引き戻す必要はないの	P5	自分の感じについて仮説を提示
T12	実際にそのギリギリの線を越えない限り、自分自身について考えずに済むし、良いとか悪いとかもない。あなたは、実際にわかってしまうのが恐ろしいのだろうって思っているのね	TR5 TM4	Cの感情や反応が今現在探求されるべき問題としてTから提示/Cの語る内容を精緻化
C13	そうなの		
T13	私はその感じにも興味を持ったんだけど、ちょっとの間、引き戻す感じを感じられる？	TR6 TM4	フェルトセンスからの象徴化を促進/Cの状況に置き換えて、自分の感じを伝達
C14	うん、感じられる	P4	
T14	軽く、それに触れて、起こることを見ていて	TR5 TM3	既出のフェルトセンスについて、Cがそれを探索し掘げていくように促進/TがCの直面を促すよう発言
C15	(沈黙) 怖い…なんだか世界が私にかみついてくるような… (笑)	P6	「引き戻す感じ」が変化
T15	うーん、そうかそうか	TR5 TM4	
C16	(さらに沈黙) とても変な感じ、その下のこの感じを感じて、今話そうとしているんだけど	(原文記載なし)	フェルトセンスの存在は認められるが、Cの状況を説明している可能性もあるため、評定不能と考えられる
T16	直接、その感じを感じてそれが何かを言おうとしている、そしてそれは恐ろしいのね	TR6 TM4	Cの新出のフェルトセンスについて言及/T12に同じ

番号	逐 語	評定	理 由
C17	とても面白い。恐怖が、ちょうどその下にある。今、私はその引き戻しと一緒にそこにただ座ることに満足している。その恐怖に行きつくまでは何も感じない。また何も感じないところに引きこもっちゃう (笑)	P6	
T17	ウム、何も感じない状態はむしろ心地良くて、恐れがその下にある、そしてあなたは、ちょっと下に押し進むと…あ…そこにそれがある (沈黙)	TR6 TM4	
T18	そうね、恐れと仲良くなってみて、で、こんな風に言ってみて、一丈夫、今、私たちは何もしていないから、私たちは、ちょっと耳を傾けたいの。そんなに恐れているのは何なのかな (長い沈黙3分)	TR6 TM5	T16に同じ/Tの感覚を用いてCの探究をサポートし続けている
C19	これ、私にとって本当に心地良い所なんだけど、でも、うーん、踏みつけられるために出すんなら死んだほうがまし	P6	
T19	それは、全くだいいんだけど、もし、踏みつけられるために出すんなら、死んでしまうか、あるいは引き戻したままのほうが… (沈黙)	TR6 TM5	
T20	じゃあ、その部分が出てきて、話しかけてきたら、うれしいかな、歓迎できそう?	TR6 TM5	
C21	丁度…あなたが、人にやさしくしていたとき、それを見ていた人が後で、あなたがその人を買収しようとしていたとかあなたに話すとするでしょう	P6	
T21	あなたの中ではそのことは良いのだけど、人が真相を誤って、何か悪いことにしてしまう?	TR6 TM5	
C22	そう (沈黙)		
C23	そう、それは確かに、違っているね	P6	

## 2. 第2の面接 (Eclectic Dynamic Therapy から)

CI は母から愛情を得られなかったが、母は祖母から愛情を得られず、CI 自身は祖母からは愛されていたということを話している。

番号	逐 語	評定	理 由
T1	おばあさんならなんて言ってたでしょうね	TR2 TM3	Cに関する事柄に言及しているが感情には目を向けていない/明示的に感情を述べていないが、Cのその瞬間の感情を引き出している
C1	彼女はそのことをあまり理解しないだろうし、そのことを非難していたと思います	P2	Cの視点が関与している内容ではあるが、感情については言及していない
T2	おばあさんにどんなことを言ってもらいたかったのですか	TR3 TM3	Cの感情に関して言及/T1に同じ
C2	私の母が、ちょうど真ん中において—私は—	P2	C1に同じ
T3	それは面白いですね。つまり、あなたは、ずっとおばあさんのことを考え続けようとしているんだけど、その考えの中で、どういう訳か、お母さんがあなたの方の間に立っていると	TR4 TM3	Cの全体像を理解しようとしている/T自身の感情を明確に表現

体験過程スケールのセラピスト・バージョンに関する一考察

番号	逐 語	評定	理 由
C3	母が私の立場にいるみたいなんです。ほら、彼女が（T：オー）私が母から必要としている同じものを母も祖母から必要としてるんです	P3	個人的な内容について言及
T4	あなた方は二人ともおばあさんから無視されているわけですね。ふーん、二人とも、二人とも何も得られない—	TR4 TM4	過去や現在の知覚を再体験するように方向づけている /C の準拠枠を T 自身のものとして感じ、それを明らかにしようとしている
C4	それに私は、私は、母が、母を許したくないんです、私は—	P3	限定された状況における個人的な感情について言及
T5	お母さんを許したくないのね？	TR4 TM4	今 C に体験されているものに言及し、再体験するように方向づけている /T 自身の感情を、C の状況に流し込んでいる
C5	はい	P4	
T6	で、お母さんが許される、なんてことがあるのかな？つまり、あなた方お二人は、子どものようにおばあさんの愛を得ようと争って、そして、お母さんが愛を得てあなたは得られない、となるよりも、2人ともそれを得られなかったほうが（C：ン？）ましだと思っているのよね	TR4 TM4	C が今の体験過程を語るように方向づけている /T が C の準拠枠を自分自身のものとして感じ、C の語る内容を精緻化
C6	ええ、母がかつて祖母の愛を得たことがあるとは思いません（T：フム）	P2	C1 に同じ
T7	しかし、どうもあなたはお母さんが得られなかったものを得ていたためにきつと気持ちよかったですよう	TR4 TM4	C が過去の感情を再体験するように言及 /T6 に同じ
C7	祖母の愛を私ができることができた唯一の理由は、多分、そのとき私が母に似ていなかったからだだと思います	P2	C1 に同じ
T8	フーン、しかしそのことは、あなたにとって心地よかったですよね	TR4 TM4	T7 に同じ
C8	その頃はそう感じませんでした、なぜなら（T：ン）私はその頃祖母を好きと思っていませんでしたから	P3	C4 に同じ
T9	おばあさんのことを？	TR2 TM2	T1 に同じ /C の発言を続けさせたり明確にしたいという目的で言及
C9	ええ、私は本当に祖母を愛していましたし、私は祖母の愛を受けるに値すると思っていました、私はただ、その（T：ウム）違いがわからなかった。そして、母はそれとは少しも関係なかったんです。（T：ウム）でもそのあと、フー、私は本当に母を憎むようになりました。それは彼女が私に対してしたことや、その性格（T：ウム）。でも今になって分かるんですけど、母は実際人生において持っていなかったものがあるんです…多分彼女の母からの愛とか関心のようなものを	P4	話の内容は感情を明らかにするものであり、個人的で内的な視点や、自己についての感情を表現
T10	あなたは今ようやく分かるんですね。お母さんが—あなたが お母さんから見捨てられたのと同じように、おばあさんから見捨てられたことが	TR4 TM4	今 C に体験されているものに言及し、体験過程を語るように方向づけている /C の視点から発言し、C の語る内容を明らかにしようとしている
C10	ええ、とても	P4	

番号	逐 語	評定	理 由
T11	あなたが、お母さんから受けたのと同じような拒絶ですね	TR4 TM4	今の瞬間にCが体験していることに焦点を当てて精緻化/TがCの準拠枠を自分自身のものとして引き継いで感じ、明らかにしようとしている
C11	ええそうです (T:ウム) そうなんです	P4	自分が今感じていることに焦点を当てている
T12	あなたとお母さんは多くの面で実際には同じ状態で、同じように奪われて… (C:ンー) 現在同じように拒絶され、同じように悪い状態にある	TR5 TM4	Cの内的な感覚の言及について仮説を示し、Cが探索し拮据していくように促進/TがCの準拠枠から発言し、語る内容を精緻化
C12	彼女から私自身を切り離すにはどうしたらいいのですか	P5	個人的体験における問題を自分に対しても問いかけている
T13	あなたはこれまで、自分自身を母とは違った存在でありたいとずっと努力してきた、とお母さんの悪い所を自分は良くしようとしてきた、とお母さんを追いやるために、自分は空想の世界に逃げ込んでこられたんですね。あなたがお母さんについて話すときの話し方でさえ、いつもそこに何かあるような感じの—適切な言葉が思い当たりませんが—それは大きな動揺のようなもので、つまり何かあなたが引き倒したり、飲み込んだりするもので…吸水管が何かのようなもので、お母さんはあなたを自分の中に引き入れようとし、あなたは、壁を掲げ、自分を守ってきた。それはとても恐ろしいことでしょうね。お母さんは自分の中にあなたを飲み込み合併しようとしたのに対し、あなたは、いつも自分は母親とは違う人間でいようとがんばってきた。いわば、私は一人の人間だ、私はあなたとは違う人間だ、と言い聞かせながら	TR5 TM5	T12に同じ/Cによって語られている以上のことを理解しようと積極的に自分の感覚を表現するように努力している
C13	まだ感じますが—それは飲み干すようなエネルギーで、そう、私は彼女が私を飲み干すと言いたいんです、わかりますか?	P6	内的体験についての気づきが起きている
T14	ウム、丁度一吸い取られて干からびてしまうってことね	TR6	C13で出てきたCの今現在の感覚について焦点を当てている
C14	そうです。そうそう	P6	内的体験についての気づきに焦点が当たっている
T15	そして彼女はとても恐ろしい人でもある	TR5 TM4	以前にCが暗に示していた感覚から仮説が生じるように投げかけている/Cが暗に感じていることを明確に表現
C15	彼女は唯一恐ろしい人なんです、うんうん	P6	C13に同じ
T16	あなたのお母さんに似ている限り、誰でも恐ろしいと言っているんですね	TR5 TM4	Cの内的な感覚の言及について仮説を示し、Cが探索し拮据していくように促進/Cが暗に感じていることを明確に表現
C16	誰のことですか?	P2	外的な状況理解をしようとしている

番号	逐 語	評定	理 由
T17	あなたは、お母さんが唯一恐ろしい人物だと言いましたが、本当に彼女はあなたの人生で最も恐ろしい人です。しかし、あなたはほかの人も恐れている—あなたは私も恐れている—あなたは—そう—心理学者を恐れている。あなたはたくさんの人々を恐れている。それはおそらくある意味で、お母さんに似ている人たちのことを、あなたが恐れているということですね。あなたが私のことを、あなたを取り込もうとしたお母さんのように感じた日もそうでしたけど	TR5 TM4	T16に同じ /T は自分の感覚を利用することなく、C の準拠枠から発言
C17	私はしっかりした人間でありたいと感じています、(T：ウム) 私は自分自身を、脆い、とてもたやすく砕けるとは感じたくない	P6	C13 に同じ
T18	心配してしまうんだけど、本当はひどく脆いとは思いたくない、と	TR6 TM4	C13 で出てきた C の今現在の感覚について焦点を当てている /T が C の準拠枠から発言し、語る内容を明らかにしている
C18	そうです、そして (T：ウム) すべての壁を降ろすと—	P6	C13 に同じ
T19	あなたはそこで吹き飛ばされる (ようにはなりたくない)	TR6 TM4	T18 に同じ
C19	ええ、それこそが恐れていることで、—私が壁を掲げるような誰に対しても感じている恐れなんです	P6	C13 に同じ
T20	あなたは何を恐れているのですか、それは本当は空想でしょう？それは—そう、空想するのは大切です、空想することは素敵なことだし—もし、あなたが壁を降ろすと、あなたは全くどうなってしまうって空想するのかな？	TR6 TM5	C13 で出てきた C の今現在の感覚について焦点を当てている /C によって語られている以上のことを理解しようと積極的に自分の感覚を表現するように努力している
C20	ちょうど、自分は破滅してしまう、って感じがしていて…これを感じるのは殆ど母に対してだけ。ほら、絶滅させられたように感じていて—ちょうど—ああ、何と言うか—ウーン、あなたが言っていたように、吸い取られてしまっ—	P6	C13 に同じ

#### IV. 考 察

Klein らの評定値の理由付け作業をもとに評定の仕方、評定値、Experiential Therapy (EXT)と Eclectic Dynamic Therapy (EcDT)の違いについて若干の考察を行う。

##### 1. 評定の仕方

評定素材には1セッションの中で数分の断片を何箇所かセグメントとして用いる場合と、対話の流れの全体を発言毎に評定する running rating がある。この評定例は2つとも後者で

あり、Th と Cl の発言毎に1つの単位として評定をする。個々の評定素材はセグメント評定に比べて概して短く、mode と peak の2つが同じ値になりがちなので、mode と peak を評定することは無意味になる。ここに挙げた Klein らの評定にも mode と peak が挙げられていない。しかし、発言が長いと1つの素材でも前半と後半で異なる値が該当する場合などが出てくる。今後、1つの素材を分割して評定するなどの工夫が必要であろう。

また、本稿の2事例の理由付け作業には困難があった。それは、話すトーンやスピード、表

情などが分からないため、“何故、これが評定値〇なのか？”分かりにくいのであった。やはり、本来の方法通り、少なくとも聴覚の情報を、出来れば視覚情報も加えてデータとするほうがよい。また、Klein らの評定基準そのものが全ての素材を評定可能にするほど明確でないように思われた。おそらく、これは視聴覚情報があったとしても同じであろう。

もう1点はTR6についてである。TR6はKlein ら(1986)によると“患者の中で、今まさに出現し、新たに認識された(newly recognized)あるいは更に深く認識された直接的に感じられた感情あるいは体験”であり、更に次の3つの評定基準の中で、“the patient’s feelings emerging or changing”、“impact of the patient’s emergent and/or shifting feelings”などに触れる、という文言がある。つまり、これらの基準を読むと、TR6はいわゆるCIのフェルトシフト段階に関する、あるいは感じの変化に関するThからの言葉かけのように読み取れる。しかし、上記の逐語録を見ると、例えば、Experiential TherapyのT13で“私はその感じにも興味を持ったんだけど、ちょっとの間、引き戻す感じを感じられる？”をKlein らはTR6と評定しているのだが、これはフェルトセンスを味わうことを促す発言であって、必ずしも感じの変化を表すものではない。Eclectic Dynamic TherapyのT14において“丁度一吸い取られて干からびてしまうってことね”にしても既に何度も使われた“飲み込む”という表現を使ったものであり、言い方に若干の変化はあるが、感じの新たな変化に関するものではない。そう考えると、Klein らはTR6を変化ではなく、変化を引き起こそうとするThの働きかけまでも含む幅広い段階として設定しているように思われる。

それに呼応するようにP6についてもExperiential TherapyのC15、C17、C19、C21がいずれもP6とされているが、逐語録からはCIに変化があるとは必ずしも言えない。勿論、EXP

スケールは7つの段階しかないが、実際には段階に反映されないほどもっと細かく感じの移り変わりが起こっている。Klein らの評定はそれらを変化として感知してTR6と評定したのであろうか。それならばもっと大きな変化の初動、すなわち、フェルトシフトといわれる位相を独立して評定できないことになる。フェルトシフトはフォーカシングの中で最も原始的な変動の部分であるので、この部分だけに特化した評定値が定められないと、CIの治療的变化への動きの検討が難しい。TR6とP6については今後、検討の必要がある。

## 2. Experiential Therapy (EXT) と Eclectic Dynamic Therapy (EcDT) の比較

EXTもEcDTも最後はP6で終わっているがこれはフェルトシフトが起きた、ということであろうか。視聴覚データがないので判定しにくい。感じ方の僅かな変化という程度であれば当然あり得るし、上に述べたようにKlein らがそれをP6と評定しているのかもしれないので、セラピーの進展という意味ではどの程度の進展があったのか判然としない。ただし、アプローチの違いやそれに対する体験過程の推進への影響は見る事が出来る。

EXTではC1(P2)に対し次のT1において、また、C3(P3)の次のT3においていずれもTR5という高いTRを発している。これがEXTの1つの特徴なのであろう。しかし、結果的に、それぞれの次のCIの発言のC2、C4ではCIがThの発言についていけず、評定不能のような発言になったり、P3に留まったりしている。後半ではCIの体験過程が低い時にはそれに沿ってTRを低くしたのは、CIの体験過程の推進の速度にThが合わせ始めたのであろうか。ところで、T14はまさにフォーカシング特有の指示で“軽く、それに触れて、起こることを見ていて”と言っている。これはTR5であるが、TM3である。結果的に次のC15はP6と高い値になっ



ているが、これは名人芸、別の言い方をすれば一種の賭けのようなものではないだろうか。つまり、TM3の状態なので、CIの体験過程にまだ完全に寄り添えていないので、CIの体験過程にフィットする言葉かけにならない可能性もある。この点、RogersのJanの事例（1986）では、Janの発言の表面上の流れには必ずしも沿わない内容であるが、TM5を維持しながらRogersが発言しているので、Janの体験過程を推進している。

それに対し、EcDTは、話の内容が込み入っており、CIも言い直すたびに内容が変わったりしている。そのため読者にも分かりづらいが、Thも混乱しかかっている様子が窺える。その混乱した中で確認しながら、次第にCIの体験過程が向上している。

T16は、精神分析でいう明確化の発言であろう。これはTR5、TM4と評定されているが、その次のC16ではCIがその意味を分からずに外的な状況理解に進み、P2と体験過程のレベルを落としている。次のT17でThは再度、T16と同じ趣旨のことを明確化しようとするのであるが、今度はThとの“今・ここ”の関係を引用し、Th.V.はT16と同じ値であっても次のC17がP6と跳ね上がっている。このことは知的な理解（明確化）であっても、出来るだけCIが実感として活用できるデータを用いたやり取りのほうで、CIの体験過程を推進することを示している。それが1つの展開点として当初、母親を“憎い”と言っていたCIが、次第に状況を恐ろしく感じると変化し、ついには母親を“恐い”と言うように変化しており、全体としてCIが自身の感じを徐々に捉えられるようになる過程が起きている。

### 3. 終わりに

以上、Th.V.を検討してみた結果、Th.V.を更に研究で用いるためには評定基準などの再検討が必要な部分もあることが分かった。しかし、どのような発言が体験過程を推進するかどうかについて検討する素材を提供する道具であることもほぼ確認できた。今後の更なる研究が望まれるところである。

### 引用文献

- Gendlin, E. T. (1964) A Theory of Personality Change. In Worchel & Byrne (Eds.), *Personality Change*. John Wiley & Sons.
- 池見陽・田村隆一・吉良安之・弓場七重・村山正治 (1986) 体験過程とその評定：EXPスケール評定マニュアル作成の試み，人間性心理学研究，4，50-64.
- Klein, M. H., Mathieu-Coughlan, P., & Kiesler, D. J. (1986) The experiencing scales. In L. Greenberg & W. Pinsof (Eds.), *Psychotherapeutic Process*. New York: Guilford Press.
- Klein, M. H., Mathieu-Coughlan, P., Gendlin, E. T. & Kiesler, D. J. (1970) The experiencing scale: A Research and Training Manual. Volume 1. Wisconsin Psychiatric Institute.
- Rogers, C. R. (1986) A Client-Centered/Person-Centered Approach to Therapy. In I. Kutash & A. Wolfe (Eds.), *Psychotherapists' Casebook*. Jossey-Bass, pp.197-208 (Kirschenbaum, H. & V. L. Henderson『ロジャーズ選集』伊東博・村山正治監訳（上・下）誠信書房，2001）